

## 2. 高次脳機能障害福祉施設における試行を踏まえた連携モデルとその課題

### (1) はじめに

障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房 笑い太鼓（以下「笑い太鼓」とする。）は、平成 13 年より授産施設を立ち上げ、一般就労へ向けた高次脳機能障害者の自立支援を行っている。平成 15 年からは、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構 愛知障害者職業センター豊橋支所（以下「センター」とする。）と連携し就労支援を行っているが、高次脳機能障害者の一般就労の難しさを感じているところである。

高次脳機能障害者の一般就労への移行支援では、補完手段の重要性がすでに指摘されているが、本人が補完手段の必要性を感じていない、活用の習慣づけがなされていないために、事業所で補完手段を使うことができず、結果として職場不適応に至る者が多かった。

そこで、笑い太鼓とセンターが連携し、笑い太鼓の活動内容を見直し、日々の活動の中で各自に必要な補完手段を活用し、事業所においてもそれらの般化を可能とする取り組みを行うこととした。その一環として、利用者自身が自分で自分の行動を管理できるようにするため、まず M-メモリーノート（以下「MN」とする。）の活用を取り入れた。ここでは、その実践経過を報告し、MN 導入の効果を考察する。併せて、就労支援の取り組みの経過も報告し、今後について検討を行うこととする。

### (2) 方法

#### (ア) 対象者

笑い太鼓を利用する、高次脳機能障害者 16 名、精神障害者 2 名を対象とする。

#### (イ) M-メモリーノートの導入方法

まず、導入対象者がセンターに来所し、Wisconsin Card Sorting Test（以下 WCST とする。）を実施した。そこで障害状況の把握を行うとともに、補完手段が必要であることを本人自身に認識させ、必要に応じて補完手段の活用訓練を行った。次に MN 導入訓練を行った。MN 訓練の手順は、手帳の構造の説明、参照行動訓練、構成行動訓練、記入行動訓練、である。

作業所全体への導入については段階的に行った。指導員が MN に慣れる時間を考慮し、最初は確実に MN を使いこなすことが期待でき、更に指導者からみて最も MN が必要だと思われる 2 名を選定し導入した。1 ヶ月後、同様に 2 名を選定し導入を行った。笑い太鼓での生活の中でこれら 4 名が MN を使いこなすことができるようになるのを待ち、また先の 4 名の効果を残りの利用者が目の当たりにし、MN を使いたい、という意欲をもたせた上で、残り全員に一斉に導入した。一斉導入にあたっては、2 日間に全ての対象者が順次センターに出向き、障害者職業カウンセラー及び研究員により WCST と MN 訓練を行った。

その後は、笑い太鼓への通所を通じ、利用者全体に対して MN の自発的な活用、般化に向けて指導を行うこととする。笑い太鼓における MN の活用の場面としては、毎朝のミーティングで一日のスケジュール

ールを記入する、家族への伝達をするよう指示を出す、作業場面等で注意をされたらその場で記入する、  
タ方のミーティングで MN を見ながら一日の振り返りを行う、作業手順書を作成する、等である。

### （３）結果

#### （ア）笑い太鼓利用者の一般的特徴

利用者のうち、高次脳機能障害者 16 名の特徴は以下の通りである。

- 年齢：20 代 3 名、30 代 6 名、40 代 4 名、50 代 3 名。
- 受障理由：交通事故等による頭部外傷 10 名、脳血管障害 4 名、その他 2 名。
- 受障からの経過年数：1 年以内 1 名、1 年以上 2 年未満 1 名、2 年以上 14 名。
- 主な高次脳機能障害の種類：遂行機能障害 8 名、注意障害 3 名、記憶障害 2 名、失語症 2 名、感情抑制の障害 1 名。
- 手帳の所持：身体障害者手帳 7 名、精神障害者保健福祉手帳 10 名。
- 身体麻痺：身体に何らかの麻痺がある者 5 名。
- 就労経験：受障前に就労経験がある者 14 名。

#### （イ）MN 導入訓練の経過

平成 17 年 11 月、記憶障害が顕著な者と日記を書く習慣がある 2 名に対し MN 導入訓練を実施した。同年 12 月、更に 2 名の利用者を選定し、MN 導入訓練を実施した。すでに導入した 2 名と一緒に MN の記入や活用について互いが声かけしあうようになり、自発的な使用が定着した。平成 18 年 2 月、残り全員に対して 2 日間に分け導入訓練を実施した。残りの利用者は先行導入した 4 名の様子を見ており、MN に対する期待が高まった状態であった。そのため、導入訓練への意欲や生活での活用についても積極的な姿勢が窺われた。また、活用の仕方をアドバイスし合う、記入についても互いに声かけするなどが見られ、自発的な活用が見受けられている。

利用者に対し MN の使用について感想を尋ねるアンケートを行った。「毎日のスケジュールがわかって便利」「人に聞かなくても一人で行動できる」「服薬管理ができる」「過去のことを思い出しやすいので自分の生活習慣を見直すことができる」「仕事でもノートを使用していきたい」指導員が注意することが減ったので過ごしやすい」などの感想が聞かれている。

#### （ウ）事例

##### ①事例 j

・対象者の概要：38 歳男性、平成 17 年 2 月、くも膜下出血により受障する。主たる障害は重篤な記憶障害である。

・MN 導入前：自分が何をしたのか記憶できないためメモ帳を活用することにした。メモを首から下げ

ていたが、どこに書いたかわからない、メモ帳を首にかけていることも忘れてしまうことが多かった。本人も毎日困惑した表情を浮かべ、時にはなげやりな態度や他者に対する感情的な言動が見られた。

・WCST：セッション 1,2 では、検査のルールが覚えられない、何を選んだのか記憶を保持できない、確認せずに次に進む等、記憶や注意の障害、あるカテゴリーへの誤反応が続いた。しかし、セッション 3,4 では補完手段（カテゴリー名カード、ポインティングデバイス、声だし）の活用、確認行動などが見られ、少しずつ正確さが高まった。その結果、WCST テストでカテゴリー達成できたことに自信をもち、補完手段の有効性について認識し、MN を使いたい、と自発的に述べるに至った。

セッション 1 (CA = 2、保続性エラー = 27)

セッション 2 (CA = 4、保続性エラー = 10)

セッション 3 (CA = 4、保続性エラー = 1)

セッション 4 (CA = 5、保続性エラー = 7)

・MN 導入訓練：MN 導入訓練では、参照訓練において、本人のこだわりにより誤反応が続いたが、キーワードを強調してインストラクションし、キーワードをいつでも参照できるよう、整理し書いた用紙を提示し、聴き取ることに集中を促し、参照が可能になる。その後は構成・記入訓練とも、比較的スムーズにこなすことができた。

・MN 導入訓練後：はじめは MN への記入のみならず、MN を置いた場所を忘れることも見られた。しかし、仲間が本人に声をかける、仲間と一緒に MN に記入をするようになり、使用が定着した。その結果、本人が「忘れる」ことを自覚しただけでなく、忘れても MN を見れば思い出せるという自信がつき、自発的に記入するようになった。精神的にも安定し、以前より明るい表情になり、周囲との関わりや活動が積極的になった。また、MN の活用を始めてからは以前よりも記憶が回復していると指導員は感じている。MN を家族との連絡帳としても活用しており、家族が本人の MN を見て、これまではわからなかった本人の行動を知ることができ、本人に対する理解を深めている。

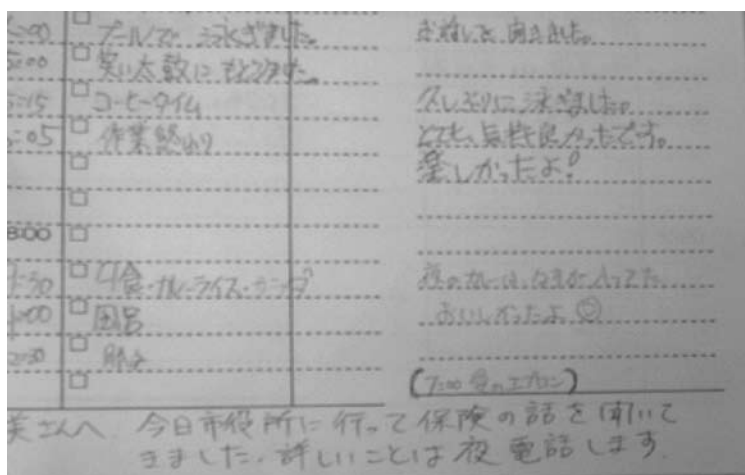


図 3-8 メモリーノート活用例 1

## ②事例 k

・対象者の概要：34 歳男性、昭和 63 年に交通事故により受障する。主たる障害は遂行機能障害である。

・MN 導入前：一日の予定や行動の段取りがわからない、忘れ物が多いなど、何かするときには、1 つ 1 つ指示が必要であった。また、注意されたことが残り、作業に集中することができないこともあった。

・WCST：検査の理解は比較的スムーズであり、8割程度の正反応が見られるが、ルールの推測ができないことが分かった。ある程度、WCSTでカテゴリー達成できるため、補完手段の必要性を感じられにくかったが、ミスを減らすためには補完手段が必要であることを2セッション以降で補完手段を導入によりその効果を体験し、説明を受けることで、補完手段の必要性について本人も納得した。

セッション1 (CA = 1、保続性エラー = 19)

セッション2 (CA = 5、保続性エラー = 3)

セッション3 (CA = 6、保続性エラー = 1)

セッション4 (CA = 6、保続性エラー = 2)

・MN導入訓練：MN訓練では、自分なりのこだわりが抜けず、使い方の定着には時間を要した。

・MN導入訓練後：MNに一日の行動予定を記入し、通所するための準備を単独で行うことができるようになった。また、指示・注意されたことをその場でMNに記入するようになり、同じ指示や注意を受けることが減った。書字に時間を要するため、指示や注意を受けた時に指導員が内容を付箋に書き、本人がMNに貼り付け、後でMNに自筆で記入するといった工夫を行っている。ただ、現時点ではまだ自発的なMNの活用には至っていない。例えば、他の利用者がMNを記入する様子を見て自分も記入する、活用すべき場面や使い方については他者からの働きかけを必要としている。



図3-9 メモリーノート活用例2

### (エ) 指導者の感じている効果

#### ①円滑なコミュニケーションが可能となったこと

以前は、夕方に一日の振り返りを行う際に、失敗や注意を受けたことの有無について指導者と利用者が口論になる、互いにネガティブな感情が残り、時には利用者の意欲をそぐ、プライドを傷つける等が見られていた。MN導入後は、失敗したら利用者がすぐにその内容をMNに記入し、夕方のミーティングではMNを見て振り返りを行うため、以前見られたような感情的な齟齬が減っている。

#### ②指導者間で一貫した指導が可能となったこと。

以前は指導員によって指示や表現の仕方が異なるなど、一貫した指導をすることが課題となっていた。MN導入後は、利用者が指導内容を記入し、指導員もMNをはさんで指導内容を確認しながら指導を行うようになった。そのため、複数の指導員から常に一貫した指導を行うことが可能となった。

### ③作業指導の効率化が図れたこと。

以前は、記憶障害のある利用者などの対象者によっては、何度も同じ作業手順を繰り返し指導していた。MN 導入後は、MN に作業手順書を作成させ、「MN の参照」を指示するだけでよくなり、同じことを繰り返し指導することが減少した。

### ④家族との情報共有ツールとして MN を活用できるようになったこと。

以前は家族に伝達事項を確実に伝えるために、指導員が直接家族に連絡していた。MN 導入後は利用者が MN に記入し、家族に確実に連絡事項を伝達・報告ができるようになった。また、家族も本人の MN を見ることで、一日何をしていたのか容易に把握できるようになった。このように、MN を通じ確実な連絡や情報共有が可能になり、本人・家族・作業所の関係も安定したものとなってきている。

#### （オ）指導者の感じている現在の課題

- 作業台に MN を置くスペースが無く机の下や別の台に置くことがあるため、必要な場面ですぐに記入・参照させられない場面があること。
- 利用人数が多く、指導員が内容のチェックを十分に行うことができない場合があること。

#### （４）MN 導入の効果

なお、これまでの使用を拒否する者はいない。その背景には、本人が利用の必要性を感じていることはもちろんだが、従来から作業所で日記帳を記入する習慣があったこと、メンバー全員が MN を利用していることによる集団の効果が考えられる。以下に、MN の導入による効果について整理した。

##### （ア）MN 導入の授産施設運営における効果について

授産施設運営における効果には、指導の効率化、コミュニケーションの円滑化が挙げられる。

指導の効率化とは、作業手順を作成する、一日の予定を MN に記入することにより、指導者が繰り返し指導する必要が減っていることにある。

また、コミュニケーションの円滑化とは、利用者との間で注意・指導の有無について口論にならない、繰り返し指導することによる感情的な対立が減少していること、家族等との間で連絡や情報共有の徹底が可能となったことを指す。

##### （イ）MN 導入の利用者に対する効果について

利用者にとっての MN の効果は、MN 導入により、指導者に言われなくても MN を見れば必要なことが自分でわかること、行動できること、思い出せることなどが挙げられる。このような行動の改善は、自信回復に役立っており、個々の利用者の障害認識の向上へと繋がっている。つまり、MN の導入は、本人たちの自律的な行動を可能にするだけでなく、適切な障害認識を育むことにも役立っている。

##### （ウ）MN の集団導入による効果について

今回の得られた成果は、MN を集団に対して導入したことによる効果が大きい。全員が MN を毎日使

用することで、補完手段を自然に受け入れている。また、互いに声を掛け合うことで活用の定着が促されている。更に、MN を利用し自律的な行動が可能になった仲間を見ることで、更なる活用の動機付けが高まっている。

実際に、移動時や屋外作業の際には、全員が MN を持参している。笑い太鼓の利用者の中には重篤な記憶障害や遂行機能障害の者も多い。それにも拘わらず、外出するときには誰一人として MN を忘れることなく持参する習慣ができていたのは、MN が、本人たちにとって、なくてはならない補完手段として確立されていることを示している。更に、笑い太鼓では、外出時に MN を持ち運びしやすいよう、職員が MN を入れるためのポーチを作製した。現在は、外出の際には、皆がこのポーチに MN や身の回りのものを入れて出かけている。



図 3－10 メモリーノート活用例 3

#### （５）就労支援における取り組みについて

笑い太鼓の利用者のうち 3 名が、市内の大型量販店にて職場実習を行っており、そのうち 1 名については正式雇用が決定している。職務内容は、開店前の店舗内における品出し、商品の前出し、PC 入力などである。笑い太鼓で MN の般化訓練が日常的に行われているため、実習生たちは皆自発的に MN を職場に持参している。ただ現在のところ、作業内容の手順や環境が整備されていること、移動が多い職場であるため持ち歩きに不便なこともあり、職場における MN の活用には至っていない。しかし、今後は作業手順や注意されたことの記入、職場と家族・作業所との連絡帳として MN を活用していくことが見込まれている。

#### （６）まとめ

笑い太鼓での MN の一斉導入は、個々の利用者の自律的行動を促進するだけでなく、施設運営上も重要な効果を上げた。現在笑い太鼓では、一般就労に向けた次のステップとして、MWS の実施を計画している。MWS の活用により一般の事業所に近い作業を体験し、その中で補完手段の必要性をより一層理解させ、その活用の般化を促し、一般就労への円滑な移行を目指している。

一方で、笑い太鼓におけるこれらの取り組みは、センターとの協力関係の上に成り立っている。センターでの WCST や MN の集中訓練の実施、職業能力評価の機会の提供などが、利用者の職業リハビリテーションへの意識付けを高めることに役立っていると考えられる。このような連携を通して、MN などの補完手段・支援ツールを支援者間で共有すること、さらには対象者に関する指導経過や指導の方針を共有することにより、ジョブコーチ支援等の新たなステップへの円滑な移行を目指すことが可能になるのではないだろうか。

《引用・参考文献》

池谷祥子他（2006）．障害者小規模授産施設 脳外傷（高次脳機能障害）工房「笑い太鼓」における就労支援への移行を目指した取り組みについて～ M-メモリーノートと M-ワークサンプルの活用について 第14回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, pp.228-231

障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 No.57 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（最終報告書）

障害者職業総合センター（2004）．調査研究報告書 No.64 精神障害者等を中心とする職業リハビリテーション技法に関する総合的研究（活用編）